

西穂高岳から槍ヶ岳縦走報告書

西岡 康広 記

日 程 8月6日～8月9日 (8月10日予備日)
メンバー C L 西岡康広・S L 土屋康広・小松純子・西岡和代
登山形式 西岡康広・土屋康広：テント泊縦走
小松純子・西岡和代：小屋泊縦走
行 程 本文中に記載

8月6日(土) 午前5時半予定通り千葉を車で出発。夏休み本番の時期でもあり、首都高速、中央高速では多少の渋滞に、また満員の談合坂サービスエリアでは駐車場の空き待ちに遭遇したが大幅に遅れることもなく、ほぼ予定通り13時ごろ新穂高温泉に着いた。蒲田川沿いの登山者用の大きな駐車場は満杯で、登山センター前の日帰り観光客用の駐車場に行った。ここに停めることはできないこと、および鍋平高原に有料駐車場が有ることを教わりそこに移動した。料金は1日300円である。

登山の準備を整え、鍋平高原駅からロープウェイに乗り14時西穂高口駅着。ここで飲料水を補給し、今日の目的地である西穂山荘に向け出発。15時半目的地到着。

ここのテント場は狭くほとんど満杯状態であったが、ヘリポートのスペースにグランドシートを広げて午後のひと時をビール片手に過ごしているパーティーに少しスペースを譲ってもらい何とか2人用のテントを張ることができた。

西穂山荘前の広場の片隅で小屋泊組のメンバーと一緒にビールを飲みながら夕食を摂り、しばし黄昏時のアルプスを堪能した。



8月7日(日) 今日の行程は西穂山荘から西穂高岳・ジャンダルム・奥穂高岳を越えて穂高岳山荘までの長丁場である。行程の長さ(コースタイム約10時間)といい、岩登りやルートファインディングなどの登山に関するあらゆる技術を高いレベルで要求される数ある縦走路なかでも屈指の難関コースである。

しかし、一定の技術と体力があれば安全かつ楽しく通過できるコースでもある。その訳は、このルートの約 3 分の 2 のところの天狗のコルから岳沢ヒュッテに下りられるエスケープルートがあること、そして最悪、時間切れになってもかなりの頻度でビバークサイトに出くわすことである。

ここで一番怖いのは雷である。雷を避けるための最善方法は、稜線からできるだけ下がって岩陰に潜むとことだが、このルート上ではこれができる場所は少ない。したがって、雷が起きそうなときはこのルートに近づかないのが唯一の対策だ。

今回の我パーティーはこのルートを簡単に抜けることができるほど力があるパーティーではないが、ビバークできる装備・食料・水と必要な登攀具を持ち、天候を見定めれば決して踏破できないルートではない。時間がかかるのは覚悟の上だ。

朝 5 時過ぎ、明るいうちに穂高岳山荘に到着すること、およびこの山を、このルートを充分楽しむことを目標に西穂山荘前を出発。天気は快晴。絶好の登山日和である。

独標の手前でハーネス・ヘルメット等を身に着け、いつでもアンザイレン（安全のためお互いにザイルを結びあうこと）できるように準備して、7 時 10 分独標到着。記念撮影。つづいて、7 時 40 分ピラミッドピークを通過。9 時 10 分西穂高岳山頂到着。



西穂山頂で、東邦大学医学部佐倉医療センターのドクターと看護師さんに出会った。彼らは西穂山荘脇の夏季診療所を中心にボランティア活動として病人や怪我人の面倒を看つつ、暇を見つけて西穂高岳までの登山を楽しんでいるようだ。

実は、昨日我がパーティーの一人が、西穂山荘までの登りの最後に足がつってしまい、この診療所のドクターの診察を受けたばかりであった。「スポーツドリンクを 1 リットル以上飲むこと、そして無理はしないように」との注意を受けていた。

こんなこともあり、今日は様子を見ながらの登山となり、調子によっては独標または西穂山頂で引き返すことも視野に入れていた。しかし、昨日の苦しそうな表情から一転、朝から快調な歩みだ。何よりもいつもの笑顔が戻ってきた。その上、たまたま西穂山頂で昨日お世話になったドクターに出会って今の体調を相談できたこともあり、更に元気になっ

て先に進むことも可能との結論に達した。

山頂にいた多くの登山者から「この先奥穂高岳まで行くのですかー。すごーい」などと言われ、パーティー全員もう行くしかない。

このドクターと看護師は千葉市在住とのことで、最後に「ちば山の会に入りませんか」とお誘いし、名前や住所、電話番号を交換して、ドクターや大勢の登山者に見送られて次の一步を踏み出した。

西穂高岳を過ぎると急に登山者の数が少なくなった。最初は鎖を頼りにした急峻な岩場の下りであり、その先はやっとつま先がかかる程度のところもある高度感抜群のトラバースや登り下りの連続である。

間の岳の手前あたりで、我々と反対に奥穂高岳から西穂高岳に向かうパーティーとすれ違うことが多くなってきた。狭い登山道でのすれ違いにはお互い細心の注意を払った。

ガイドに連れられた登山客から「この先滑りやすい岩場があって大変ですよ」と声をかけられた。たぶん通称「間天のコル」(間の岳と天狗岳の間のコル)から天狗岳にかけての、急傾斜の逆送スラブのことだろうと思った。なるほどそこは、我々とは逆のコースをとる彼らにとっては天狗岳からの下りの岩場、どちらかというに登りに使いたいところだ。「まだまだ先は長いですね。頑張ろう」と声をかけあった。

間の岳の手前でトレールランをやっているランニングシャツに半パン、ランニングシューズの人とすれ違った。「今日はどこからですか」と尋ねたところ、午前4時に新穂高温泉を出て、白出沢を登り、奥穂高岳を経由してここまで来たとのこと。標高差2000メートルの急な坂を登り、歩くのもやっとなで、走るなどとてもできそうにないこの稜線を通ってこの時間にここまで来たのか。いやはや恐れ入りました。

間の岳から下りの途中、間天のコル手前の小さなピークから見た天狗岳は、先ほどすれ違った人に聞いた逆送スラブがコルからピークにせり上がり圧倒的な迫力で迫ってきた。しかし、近付くと意外に傾斜は緩く鎖もあって結構楽しめるジャン。

独標から、数えきれないほど登り下りを繰り返しているうちに、12時30分やっとな狗岳にたどり着いた。シーズン真っ盛り、すれ違いのための停滞も多かったことだし仕方がないかと思いつつも時間の遅れが気になってきた。



天狗岳の山頂で少し長めの休憩をとった。時間的にはこのままのペースだと、奥穂高岳に着くのは午後 6 時ごろだろう。安全性に重点を置けば岳沢ヒュッテに下るべきだが、下れば日程的に厳しくなってしまうし・・・。

山登りは安全が最も重要であることは言うに及ばない。が、十分準備した上で果敢にチャレンジすることも大切であろう。

少し極端な言い方かもしれないが、安全性だけを考えれば、現在の日本では登山などすべきではない。山に行かなくても生きていけるからである。しかし、チャレンジし成功すればもちろん、失敗してもそれはそれなりに大きな達成感を味わえる。これがなければ登山など成立しない。チャレンジする気持ちとその楽しさが無ければエベレストやマッターホルンはもちろん槍や穂高もそして剣もまだ未登峰であったに違いない。このチャレンジ精神こそ我々を山にいざなう原動力ではないだろうか。この感覚を大切にしたい。

皆に元気があって、明るいうちに穂高岳山荘に着けばよしとする当初の目標とはずれてはいない。前進だ。小屋泊組は穂高岳山荘に到着が遅れる旨の電話連絡をした。

ここから天狗の科尔への下りは、鎖にぶら下がりながら下るオーバーハング気味の所であり、このルート上の最も要注意場所の一つである。今まで何回も繰り返した岩場の登り降りのおかげでここも難なくクリア。



天狗の科尔で岳沢ヒュッテを示す道標を見ながら、まずは壘岩の頭を目指した。ここからジャンダルムまでの標高差は約 300 メートル、比較的岩がしっかりしてきて岩登りを楽しめるはずだ。ただし、疲れた体にはこたえる登りだ。

最初は少し傾斜のゆるいガレ場が続く。ここでは落石の心配も少ない。足元をしっかり確認しながら高度を稼ぐ。



ほんの数メートルではあるが高度感抜群の「ナイフリッジ」、そして適当にホールドがる「フェース」、「ルンゼ」と呼ばれる「V」字状に切れ込んだ岩が垂直に近い角度で立っている岩壁を、その「V」字の溝に沿って攀じ登る。それなりに岩登りが楽しめた。

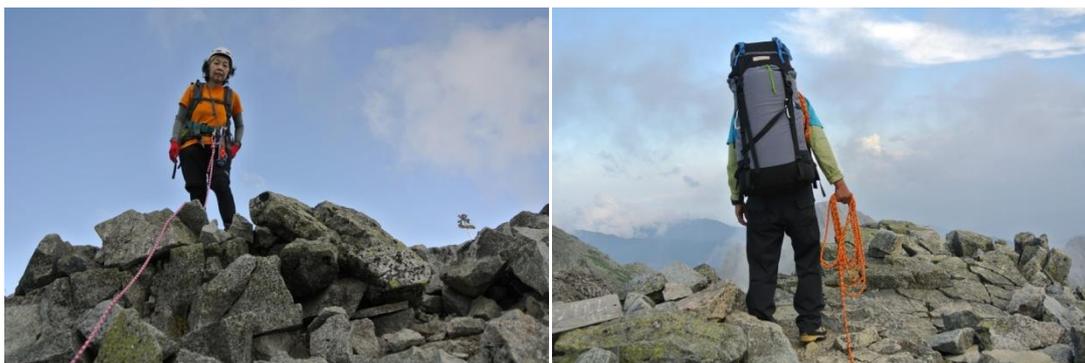


畳岩の頭を過ぎて、岩と戯れながら踏み跡をたどって登っているうちにペンキで書かれたルートを示す○印や矢印が少なくなってきた。どうもルートを外したらしい。ここは信州側のがれ場を登り、微妙なバランスを必要とする 10 数メートルのフェースに取り付き、強引に上へ上へと攀じ登ってコブ尾根の頭に出た。振り返れば主稜線沿いに登りやすそうなルートが見えている。われわれと同じで、ここは皆さん適当に気の向くまま好きなどころを登っているようだ。

正面をみると目の前に一段高くジャンダルムの丸いピークが見えてきた。コブ尾根の頭の少し手前で、メンバーに疲れの色が見えてきたこともあり、より安全を期すべくアンザイレンした。そして、時間の問題もあるのでコンティニュアンス（ザイルで結びあった二人が同時に動く方法）で行動することにした。

コブ尾根の頭からジャンダルムに向かって少し下って、ジャンダルムへの最後の登りは、取り付いてすぐ鎖に沿ってまっすぐ登るルートと、狭いバンドを左側にトラバースするルートがあるが、ここは後者を選び、その終了点から崩れそうながれ場を落石に注意しながら右上に向かって登る。16時ジャンダルムのとっぺんに立った。

ここからは奥穂の山頂も今晚泊まる山小屋やテン場も手の届きそうな距離に見える。しかし、まだまだ緊張を強いられる岩場が連続している。がんばれ！！



これまた高度感抜群のロバの耳を下り、飛騨側の側壁を恐る恐るトラバースすれば、最後の楽しみ「馬の背」である。ここだけはスタカット（ザイルで結びあった二人のうち一人が動き、他の一人は動いている人の滑落に備えて確保する方法）で登る。



今日の楽しい登攀が終わった。

もう少し早く着きたいと頑張ったが、やっぱり想定していた通り奥穂高岳山頂に午後 6 時過ぎに到着。このルートの楽しさも、しんどさも充分味わいつくした一日であった。

8月8日(月)今日も快晴である。山の天気の様相はあくまでも私たちの味方なのである。

昨日の疲れが残っていることもあり、今日は槍ヶ岳まで行くはずであったが、少し、いや大幅に予定を変更し、穂高岳山荘から北穂高岳・大キレットを越えて南岳までとした。

出発前に山荘の前で記念写真を撮るべく小屋泊組とテント泊組が準備を終えて集合した。



ここで思わぬ事故に遭遇した。奥穂から小屋への下山路で、小屋から少し上に二段の鉄梯子がかかっているが、そのすぐ下の短い鎖場から一人の男性が10メートルほど転落し狭いが平らな登山道の上でかろうじて止まった。我がパーティーの一人がこの事故を目撃した。そのあと誰かが小屋に通報したことで、小屋から関係者が数人現場に走って行きしばらく介抱していた。

けがの程度など詳しい状況は分からなかったが、しばらくすると当人は立ちあがり何とか歩けるようになって、小屋まで確保されながら下りてきた。転落したばかりで痛さも感じていなかったのかもしれない。大きな怪我がなければいいのだが……。

本人は自分が転落したことすら分かっていないようで、小屋の関係者が、この時テラスで目撃した人たちに、彼がどのように転落したか聞いていた。

彼はヘルメットを着用していた。これも大事に至らなかった要素であろう。山にもよるが岩場の多い山ではヘルメットは必ず持って行こう。そして、持っているだけではだめできちんと被ろう。

彼は奥穂の山頂で御来光を迎えてその帰りだったのであろう。確かに、ここでは小屋も目の前にあることからつい油断をすところでもあり、事故が起こってもおかしくないところである。我々も残りの行程細心の注意を払って行こう。

午前7時、遅くなったが気を取り直し出発。奥穂から北穂までの縦走路は、やはり岩登りを楽しめるルートである。しかし、ここを通る人が多いせいか、鎖や・梯子などが整備され過ぎていて、ちょっと物足りなさを感じるところでもある。

昨日の疲れがとれていないのか、出発前に見た事故に委縮したのか、どうもペースが上がらない。でも、皆さん昨日と同様岩場を楽しむことはできているようだ。

今日の到着点を南岳に変更したことで行程は短くなり、下ばかり見て歩くのではなく景

色を楽しむ余裕も出てきた。途中で見た前穂北尾根は一昨年秋、大爆発で多数の犠牲者が出てから間もない御嶽山を見ながら今回と同じメンバーで踏破したところである。その素晴らしいスカイラインは、その時初めてこのルートに登った二人のメンバーには感慨深く見えたのではないだろうか。そして、その時の経験は今回の縦走にきっと役立っているはずだ。

涸沢槍を過ぎ、最低鞍部を過ぎて小さなピークをいくつか越えた頃、メンバーの多くは（たぶん4人のメンバーの内3人は）同じことを考えていた。それは、北穂高小屋前のテラスでジョッキを傾け、喉を潤す自分達の姿であった。

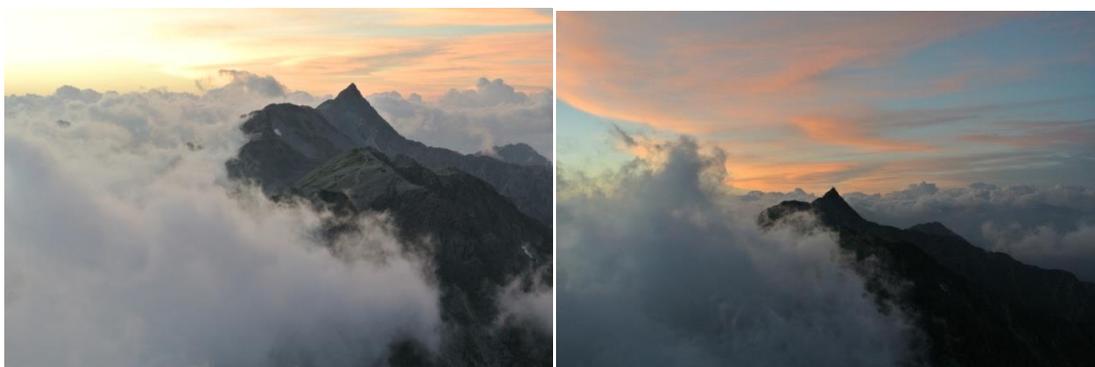
そして、今日は北穂まででもいいのかと考えるようになっていた。この快適な天気の中こんな贅沢はめったに味わえない。

滝谷ドームが身近に迫ってくるようになり北穂南峰に突き上げるこのルートの最後の核心部を前に休んでいたときに、それは妄想から確信へとなってしまった。

案の定、北穂高岳山頂に着いた時、ここでのんびりビールを片手に暮れゆく槍や常念、そして奥穂を中心に、北尾根を従えた前穂それに続く吊尾根、今回たどりし西穂・間の岳・天狗岳・ジャンダルムかけてのスカイラインを愛でることとなった。

「大キレットは又の機会に……」

「いつの日かきっと、このメンバーで……」



8月9日(火) 大キレットと槍ヶ岳を次回にゆずることにした我がパーティーは、今回の山行の成果を胸に北穂高岳から涸沢・横尾を経由して上高地へ、そしてその先にある温泉に向けて出発した。